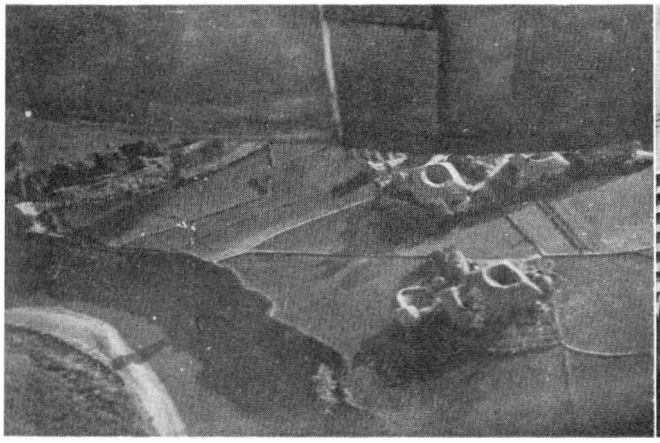
琉球大学学術リポジトリ

第8回極東農業普及事業会議に出席して(1)

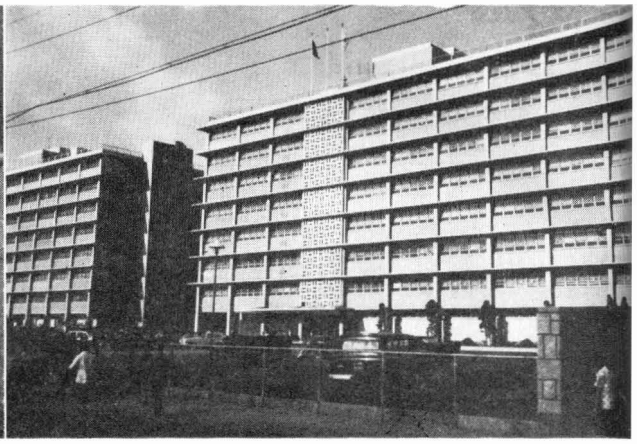
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古謝, 瑞幸, Koja, Zuiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20571

空から見た韓国南部沿岸の農耕地と工業地帯？

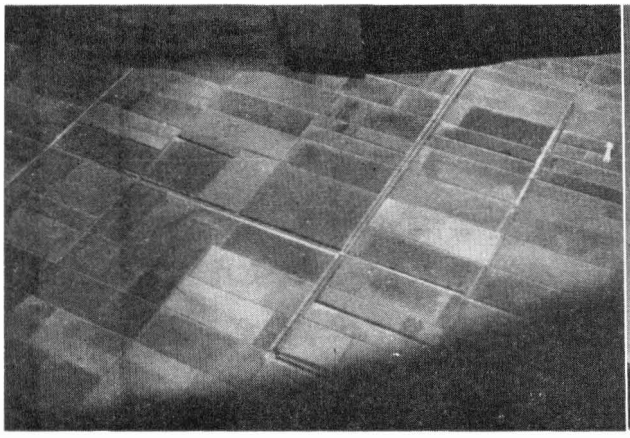
パラソルの花が咲く市役所前の広場



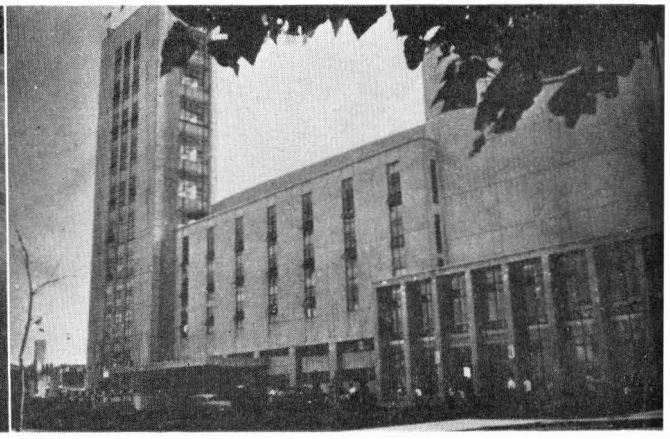
空から見た山間部落　口字型の屋根が特徴



瓜二つの近代ビル国家再建最高会議（左）と米国経済開発協力局（右）



金蒲周辺の短冊型の水田の美



文化の泉　市民公会堂

ソウル郊外の広い道路と並木

韓日親善野球大会の立看板も鮮かな球場前

第8回

極東農業普及事業会議に出席して

＝1＝

第8回極東農業普及事業会議は韓国主催、米国国際開発局後援で去った6月11日から同23日まで韓国の首都ソウル(京城)で開かれた。この会議は極東の各国が順番制に主催して行われるようになっているが、第7回までは琉球はオブザーバーの資格である上に、代表を送ったことはない。幸にも今回からは正会員に認められ、韓国政府から同国駐在米国顧問団を通じて、琉球からも二人の代表を派遣するよう高等弁務官宛に鄭重な招待状が送られてきた。その結果、経済局農業改良課の仲里文代女史と私が初めての琉球代表として派遣されたわけである。

このような意義深い国際会議に出席の機会を与えられた事に対して身に余る光栄を感ずるものであるが、それにあわして、各国代表によせられた韓国総理大臣をお初め、外務大臣、農林大臣、公報大臣、韓国駐在米国顧問団農村振興部、その他多くの著名な個人及び団体からの歓迎の御言葉、かずかずのレセプションに対してはいかにして感謝を申上げればいいかを知らない。

さらに、金鐘大農林次官と共に同会議の中心人物として御活躍された農村振興庁長鄭南圭博士、縁の下の力もちとして公私を問わず献身的に御協力して下さった多くの同庁及び、米国顧問団職員に衷心より感謝申上げたい。また、はるばるワシントンの国際開発局からP.V.ケプナー氏とH・カサリン博士が出席し、会議の顧問として立派な指導助言を与えられた。

さて、会議の内容に入る前に、まず、韓国の印象を記しておみやげ話としたい。もちろん、筆者が飛行機や、自動車の窓、寸暇の散歩を通じてのメモであるから、「のぞき歩記」とした方がぴったりする。

空から見た韓国

東京の立川空港から4時間20分も飛行すれば韓国の金蒲空港につく。油を流したようなおだやかな日本海の上空を1時間で横断した飛行機は釜山の北方から韓国に入域し、西寄りにゆるやかな弧をえがいて金蒲に向った。

その間、飛行機の窓ガラスに接したまま、映画のスクリーンのように次から次へと変りゆく韓国の表土を大いなる好奇心をもって眺めていた。

最初に浮かんだのは南部沿岸の水田地帯であった。無数の短冊がたをした水田は淡い緑で覆われてとても美しかった。つい、「朝夕食卓に上るうまい韓国米はここから出るのかなあ」と連想した。それも束の間、やがて現れ出したのは、すそに青い衣をまとうた半身裸体の山々である。失礼かも知れないが、フラダンスを踊るハワイ娘みたいだ。只只不思議でじいっと見つめていた。何時頃から、どうしてあんなになったのだろうと降りてから聞く積りだったが、とうとう忘れてしまった。

先程、海原のような水田を見たのだから、それを潤す水源が気がかりだった。すべての山がこの調子かなあと心細い思いで見つめていると、やがて全身に若々しい緑衣をまとうた山がポツポツと浮び出した。真白い巻雲と織りなした鮮緑は、まともに受けた太陽の光線に映えてすばらしく美しかった。これでさっきの心細い気持もすっかり吹飛んだ。北上、即ちソウルに向って進む程、山は安泰している。ソウルに近ずくにつれて、飛行機は次第に高度をおとしてきた。ますます山の肌がはっきりして、自然林と人工林との区別さえつくようになった。大きい山も小さい山も造林計画によって緑化され、南部で見受けたようなはげ山は殆んど見られなくなった。ちちとして進まぬ沖縄の緑化運動を思い浮かべ乍うらやましくなった。もうその頃からは名も知らない平野が飛行機の窓をうめつくし、不定形の田畑、短冊がたの水田地帯と目も急がしくなった。おや水田の真中に着陸したのではないかと思ったらもう金蒲飛行場になっていた。以上は空から見た韓国の文字通りの初印象である。

韓国が今日最も重点的に力を注いでいるのは農業で

『農業第一』というキャッチフレーズもある位だが、それと不離一体の事業として山地の植林事業がある。

外務大臣主催のレセプションで張けい淳農林大臣や柳へい賢国家再建最高会議農林分科委員長などのお歴々と直にお話し合いをする機会に恵まれたが、どちらも異口同音に直面する植林事業の重大性を強調されておられるのには深い感銘をうけた。大田主席が琉球の緑化男であるならば、韓国のそれはこの御二人であろうと想像した。

革命政府によって樹立された五カ年計画の植林事業は着々と進められているが、その政策は非常に興味深いので農業問題と併して後で述べたい。

首都ソウルの横顔

出発前、韓国は戒厳令下らしいから注意しなさいという事をよく聞かされて内心は少々不安でもあった。しかし、なあに、同国政府からの正式の招待により平和な農村問題会議を開く位いだから、そんな事はあるまいと信じていた。

案の上、平和そのものであった。襟元を正して金蒲の米軍空港ターミナルに入ったが、武装兵の一人だに見られず、緊迫感なんて微塵も感じられない。側の国際ターミナルもこれまた同じ。心臓部のソウル市街はなお更のこと、いかめしい雰囲気とはおよそ縁遠い話であった。

さて、ソウルは600年の古い歴史をもつ韓国の首都である。その名にふさわしく、メインストリートには偉容を誇る近代建築が立並び立派な国際都市の様相を呈している。朝鮮動乱ですっかり破壊されたという市街には弾の傷あとをうかべたビルはもはや見当らない。スマートな官庁、銀行、デパート、映画館、市民公会堂などが巾広いアスファルト道路に面して林立しているのを見るにつけ、その復興ぶりには恥しい乍ら認識を新たにした。動乱後新植されたであろう街路樹はすくすくとのびて街の美観を添え、新らしく出発した韓国の若さと意気を鼓舞しているかのようである。

市内は縦横無尽に電車、バス、タクシーなどが走って交通も至極便利である。ここで特筆したいのは一部の外国車を除いて、官庁用とタクシー用の車は殆んどジープを利用しているという事である。　国民の税金を最大限に有効に活用しようとする徹底した公僕精神、決して見栄をはらない韓国人の国民性には敬服せざるをえなかった。ややもすれば借金してでもぜいたくな外国車に乗りたがる沖縄人にとっていい教訓だと思った 。

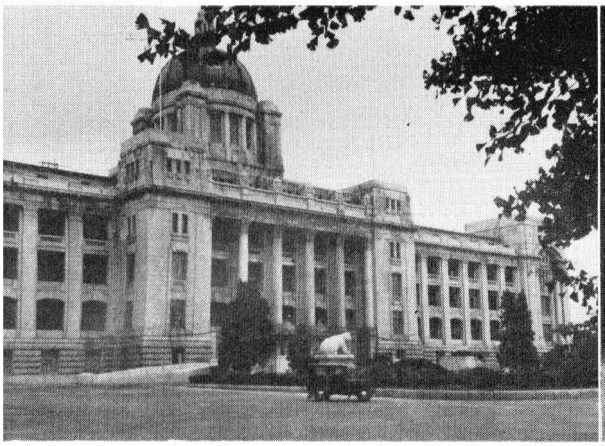
アスファルトの 街路は何時、 誰がやるとも知らないが、いずこも清掃が行き届いて道往く人に好感を与えている。市役所前は六つの大通りが交叉して大きな緩衝地帯を形成しているが、そこはチェインで車道から区切って市民のいこいの場所にあてられている。無数のテーブルセットには、赤白のしゃれた日傘の花が咲いて涼味をたたえている。そこでは清涼飲料水やビールなどが売られている。市民の服装は韓国服と洋服に二大別する事が出来る。特に外来者の目をひくのは女性の韓装である。セミの羽のようにうすく透り、ふわふわとかがとすれずれまで達したドレスは気品があり、見るからに涼しそうである。一般的に白色無地だが、ブルーやピンクなどもある。また、朝鮮靴の先端はハリュウ船のおもてのように上向きにしゃくれ、こっけいである。美人が多いのもこの国の自慢の一つ。これまでに見たニューヨークやサンフランシスコ、お隣の東京を陵ぐと言っても決して過言ではない。一方、男性も女性に劣らず、身だしなみがしっかりして気持がいい。色とりどりの柄もののシャツが流行し、市場やデパートの陳列棚まはんらんする程それが目立っている。

これを不思議に思う事が不思議かも知れないが、16日間滞在して那覇名物の精神病者や酔っぱらいなどのようなものが路上に1人も見受けられなかった。

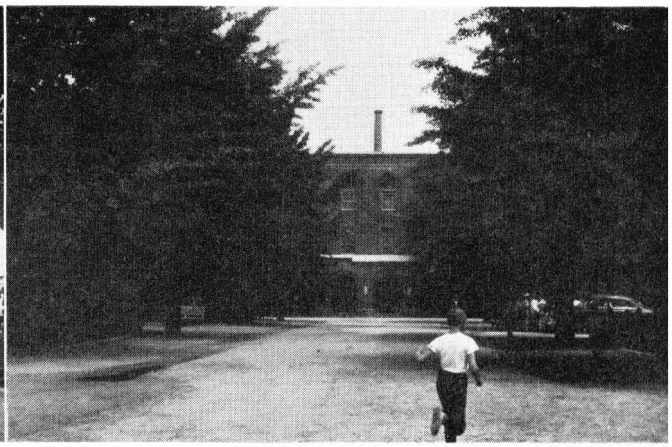
それに、何処の大都会でも見られるようなうようよした昼の大群集が余り見られない。国民の一人々々がめいめいの職場で国づくりに一生懸命に働いている証こだろう。街に活気が溢れるのは退庁後である。その頃からは何処からとなく集った人の波が道一杯に広がって、とても賑やかである。しかし市場の混雑は那覇も変らない。特に朝と夕方は足のふみ場もない。

ソウルのセンター街　左のビルは中央郵便局

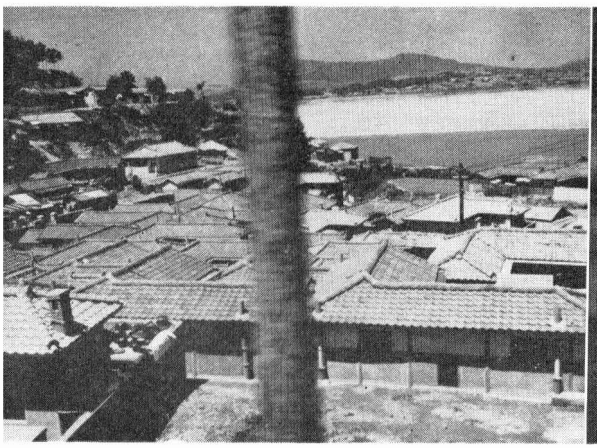
韓　国　銀　行



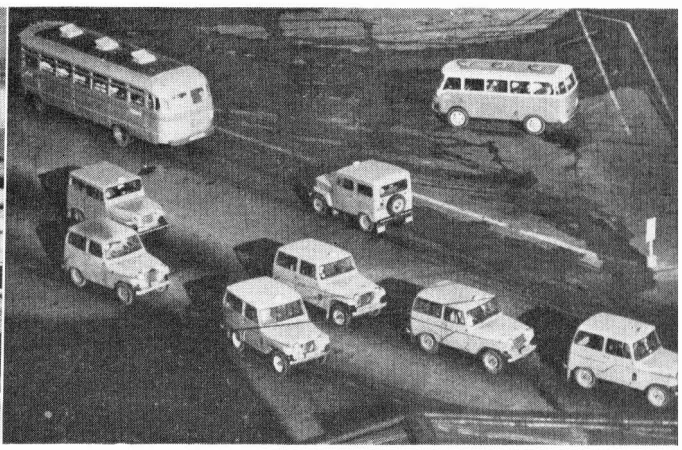
総　督　府　あ　と



みどり濃き国立ソウル大学の正門前



漢　江　沿　岸　の　中　層　級？



ジープを利用したタクシーと大型　小型のバス

トウガラシ　ショウガ　ニンニク　ウリなどで賑う野菜市

客を待つ朝の果物市

親切な韓国人

今をさかのぼる 500年前、我々の先祖が韓国貿易をしたという事は郷土史で少し学んだだけで、その内容についてはよく知らないが、韓国人は同じ事実を我々以上に知っているのには認識を新たにした。そのせいもあってお互に親密さが湧いて愉快であった。文頭でも韓国人は非常に世話好きだと申し上げたが、それは街頭に出て市民と接するとなおはっきりする。 ある日の朝、 仲里女史と二人で同僚のホテルを探すために公番を物色していた。出勤時の中年紳士を呼止めて、公番の所在を尋ねた。すると公番への用件を知ったその紳士は、私が見取図をかいて上げましょうかと申出た。いや貴方は出勤時のようだからとようやく断ると、公番の所在を教えて先の方向へ去って行った。 1丁目ほど行くと、韓国銀行のビル脇に件の公番があって三名の若い巡査が執務中であった。来意を告げると三名ともペンをおいて私達の話に耳を傾け、共同できれいな見取図をかいて下さった。民主警官と市民の親切には頭の下がる思いがした。30才以上5.60才までの人達は私達以上に日本語が達者であるのにはびっくりした。終戦以来17年目に初めて日本語を使う人が多いが、アクセントはとてもきれいである。韓国人は一般的に語学の才があると言われているがそう思った。 それは国際共通語である英語を話すインテリーが意外に多い事からもうかがえた。しかもそれは極東で一番きれいな英語ではなかろうか。ある日、韓国家政協会主催のティーパーティーに招かれた。余興として韓国一流のモデルをつかった豪華絢爛なファッションショーが催された。申し上げたいのはそこに並居る年輩の御婦人達が英語が上手であった事である。隣席の52.3才位の御婦人に気をきかした積りで日本語で話しかけたら、あべこべに英語で返事されて恐縮した。 好奇心で何時頃から英語を習い始めましたかと聞くと、戦前女学校で一寸習ったが、戦後必要に迫られて独学と直接米人と接触することによって覚えただけと説明して下さったがきれいな英語であった。

只一つ、不自由なのがあった。それは官庁を始めすべての建物の看板が漢字ならぬ韓字一色である事だ。英語と二段書きにしてあるのはいい方で、それとて非常に少い。新聞の見出しは殆んど漢字を用いているのでアウトラインはつかめるが、内容は漢字と韓字を混用しているので一寸むずかしい。 （つづく）

（古 謝 瑞 幸）